京北の古墳時代

熊井　亮介

1. はじめに

京北地域には、現時点で縄文時代～近世にかけての遺跡及びその候補地が 118 箇所存在する[(1)]。その中で、古墳時代の遺跡は約 50 箇所あり総数の約半分を占める。特に古墳・古墳群は 43 箇所、総数は 235 基を数える。当地域の古墳分布の密度は京都府下でもトップクラスと考えられ、京北地域を特色付けるとともに、地域史を復元するうえで欠かすことの出来ない要素である。

しかし、本地域の古墳・古墳群についてはほとんどのものが測量調査等も実施されておらず，また発掘調査が実施され内容が判明したものもごく一部にとどまる。このように各古墳の基礎情報が不足した状況もあってか、本地域の古墳・古墳群が研究の俎上に上がることはこれまでほとんどなく、その様相についても不明瞭となっている。以上のような状況を鑑み、本稿では京北地域の古墳時代の遺跡についての情報の整理を行い、その分布状況について考察を行いたい。また、古墳の消長を周辺域と比較し、本地域の特色について考えてみたい。

2. 既往の調査成果

前述のとおり、京北地域で実施された発掘調査は少ない。ここでは測量・発掘調査が実施された古墳時代の遺跡について、その成果を簡単にまとめておきたい。なお、本節では調査等により古墳時代の遺構が確認されている事例のみを対象とした。

東山遺跡（A） 上桂川と弓削川の合流点の南側の丘陵に所在する。1999・2000 年に発掘調査が実施されており、時期が明確でないものもあるが古墳時代中期を中心とする時期の竪穴建物を複数棟確認している。また、少量ではあるが韓式系土器も出土している。対岸の丘陵上に所在する周山古墳群との関りが想定される。

塔遺跡（B）山国盆地の桂川右岸域に所在する。立合調査や複数回の発掘調査が実施されており、縄文～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。このうち、1994 年の発掘調査では古墳時代後期の掘立柱建物 2 棟と L 字型に屈曲する柵列が確認されている[(2)]。掘立柱建物は重複した位置関係にあり、大きいものは南北 3 間で東西 5 間以上，小さいものは南北 2 間で東西 4 間の規模を有する。この遺構は出土遺物から TK209 型式期に位置付けられている。

上中遺跡・上中太田遺跡（C） これまでに上中遺跡では 6 回、上中太田遺跡では 1 回の発掘調査が実施されている。上中遺跡では、1 次調査で弥生時代後期～古墳時代前期にかけての旧流路，3 次調査で古墳時代前期の土師器を多量に含む粘土採掘坑とみられる不整形土坑群、5 次調査で古墳時代前期の竪穴建物・柱穴・土坑などが確認されている。また、上中太田遺跡では古墳時代後期の竪穴建物が確認されている。

周山古墳群（1） 9 基の古墳で構成される古墳群である。1 ～ 4 号墳について部分的な調査が実施されている。1974 年に同志社大学考古学研究室が 1 号墳の発掘調査、2000 年には京北町教育員会が 1・2・4 号墳等について部分的な調査を実施している。1 号墳については現在まで正式な発掘調査報告書は刊行されておらずその詳細は不明な点が多い。このような状況を加味し、龍谷大学考古学研究室が 2013 年に測量調査を実施し、その成果を報告した。また、同年には辻川哲朗氏が 1974 年の発掘調査日誌等をもとに整理した情報を出土した埴輪とともに報告している。これらの調査等により、1 号墳の情報の一端が明らかとなっており、1 号墳は葺石と埴輪を有する 1 辺 16.5 mほどの方墳、2 号墳は一辺が 13 mほどの方墳、4 号墳が 1 辺 17 mほどの方墳と考えられる。なお、1 号墳は出土した埴輪から古墳時代前期末から中期前葉に位置付けられ、京北地域で確認されている数少ない首長墓と評価される。

のぼりお古墳（6） 1992 年に発掘調査が実施されている。調査の結果、直径 13m ほどの円墳であり、無袖式の横穴式石室を有することが明らかとなった。須恵器や土師器、鉄刀、不明鉄製品などが出土しており、6 世紀末から 7 世紀初頭に位置付けられる。

塔村古墳群（9） 2 基からなる古墳群である。1 号墳は直径 20 mほどの円墳である。無袖式の横穴式石室が確認されており、7 世紀に位置付けられる。現在も開口しており、京北地域では数少ない石室実測図が公表されている古

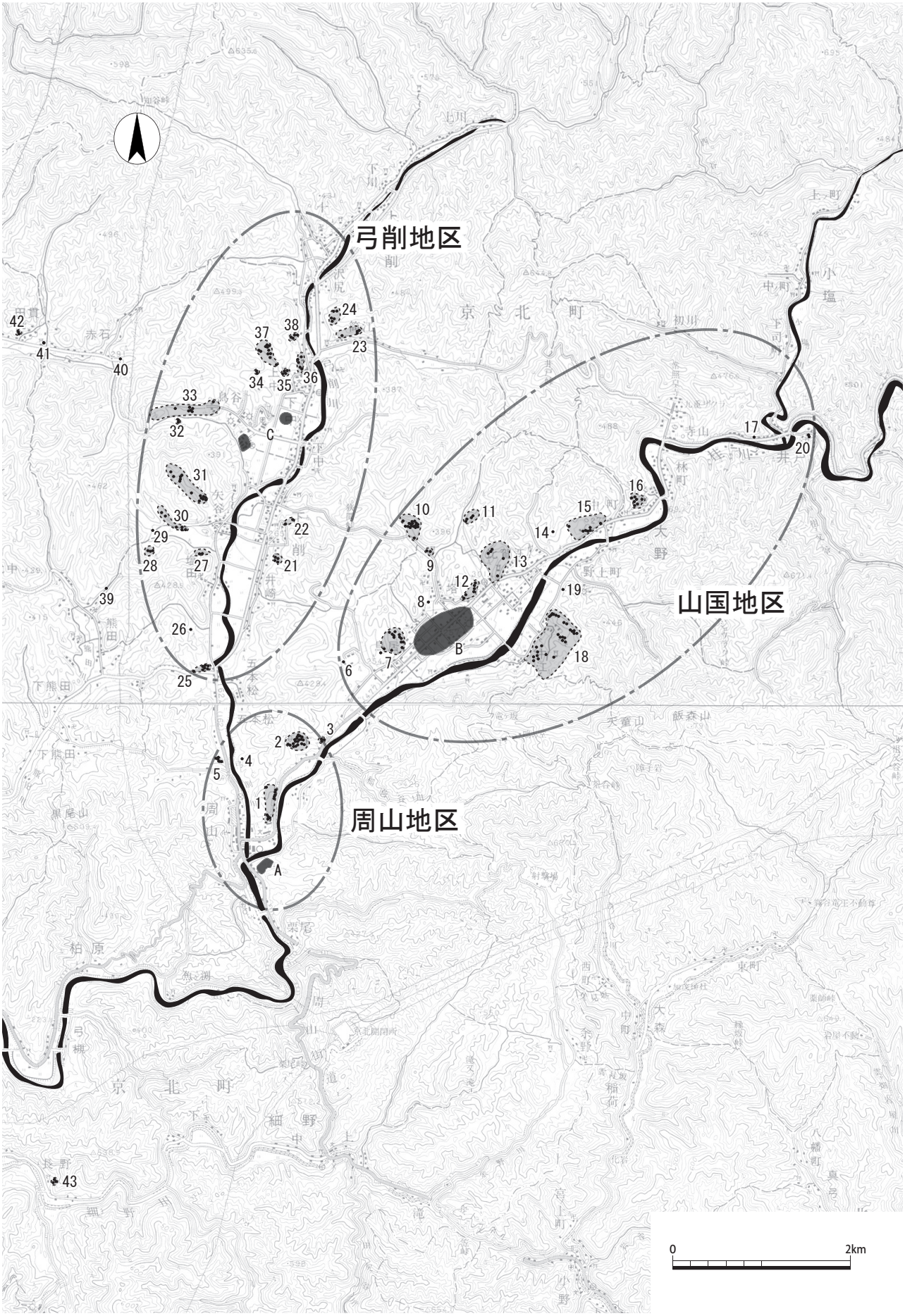

図 30　京北町の古墳分布図

表３　京北地域の古墳時代の遺跡一覧

図番号	遺跡地図	種類	種類	地区	備考
A	2089	東山遺跡	散布地	周山	中期～後期の竪穴住建物を確認。
B	2019	塔遺跡	集落	山国	後期の掘立柱建物跡とL字型の柵列を確認。
C	2048	上中太田遺跡・上中遺跡	集落	弓削	前期・後期の竪穴建物などを確認。
1	2033	周山古墳群	古墳	周山	方墳4基・円墳5基。周山1号墳は前期末の首長墓。
2	2030	折谷古墳群	古墳	周山	円墳１９基。
3	2031	折谷東古墳群	古墳	周山	円墳２基・方墳１基。
4	2079	宮坂古墳	古墳	周山	円墳。
5	2078	大年古墳群	古墳	周山	円墳６基。
6	2026	のぼりお古墳	古墳	山国	円墳で無袖式横穴式石室を有する。古墳時代後期末。
7	2025	鳥居古墳群	古墳	山国	円墳１３基。
7	—	八幡神社古墳	古墳	山国	神社跡西側に新規古墳。鳥居古墳群に属する古墳か。
8	2023	三明院古墳	古墳	山国	円墳。
9	2020	塔村古墳群	古墳	山国	円墳２基。1号墳は無袖式の横案式石室を有する。
10	2024	三宅谷古墳群	古墳	山国	円墳１７基。うち１６基は横穴式石室か。
11	2017	院谷古墳群	古墳	山国	円墳４基。
12	2022	愛宕山古墳群	古墳	山国	円墳５基・方墳１基。
13	2016	比賀江古墳群	古墳	山国	円墳５基。
14	2013	大野西古墳	古墳	山国	墳形不明。
15	2012	大野古墳群	古墳	山国	円墳１基・方墳６基。
16	2009	長池古墳群	古墳	山国	円墳７基。
17	—	霊願寺内古墳	古墳	山国	墳形不明。境内内に所在。
18	2011	中江古墳群	古墳	山国	円墳２８基・方墳４基。１１号の西に新規古墳か。
19	2008	野上古墳	古墳	山国	円墳・墳形不明1基づつ。
20	2004	祖父江古墳群	古墳	山国	円墳3基。
21	2071	しが田古墳群	古墳	弓削	円墳４基。
22	2067	狭間谷古墳群	古墳	弓削	円墳２基。
23	2037	筒江古墳群	古墳	弓削	円墳４基。
24	2036	岩ケ鼻古墳群	古墳	弓削	円墳４基・前方後円墳1基。
25	2075	出口古墳群	古墳	弓削	円墳７基。
26	2074	五本松古墳	古墳	弓削	円墳。
27	2065	塩田口古墳群	古墳	弓削	円墳４基。
28	2064	塩田古墳群	古墳	弓削	円墳３基。
29	2063	井崎古墳	古墳	弓削	円墳。
30	2062	矢谷奥古墳群	古墳	弓削	円墳８基。
31	2060	矢谷古墳群	古墳	弓削	円墳１３基。
32	2051	ふくながる古墳群	古墳	弓削	円墳2基。
33	2050	鳥谷古墳群	古墳	弓削	円墳9基・方墳1基。
34	2043	上中古墳群	古墳	弓削	円墳２基。
35	2040	八幡宮裏山古墳群	古墳	弓削	円墳２基。
36	2039	弾正古墳群	古墳	弓削	円墳４基。
37	2042	宮の谷古墳群	古墳	弓削	円墳11基。
38	2038	筒江夏路古墳群	古墳	弓削	円墳４基。
39	2080	熊田古墳	古墳	他	円墳。
40	2055	田貫東古墳	古墳	他	円墳。横穴式石室か。
41	2054	白山古墳	古墳	他	直径の50ｍとされるが，規模縮小する可能性高い。
42	2053	田貫古墳群	古墳	他	円墳2基。
43	2094	長野古墳群	古墳	他	円墳2基。

墳である。

愛宕山古墳（12） 1982 年に発掘調査が実施された。調査の結果、周溝を有する一辺 20 m四方の方墳であることが明らかとなった。葺石・埴輪は認められず、埋葬施設は東西方向に主軸を有する割竹形木棺の直葬である。副葬品としては、銅鏡（獣面鏡・獣形鏡・捩文鏡）、玉製品（勾玉・管玉・ガラス小玉・琥珀小玉・碧玉製玉・水晶算盤玉）、武器（鉄剣・鉄鏃）、工具（鉄斧・鉇）、土師器片が出土した。出土遺物より古墳時代中期初頭に位置付けられ、周山 1 号墳に後続する首長墓と考えられる。

鳥谷古墳群（33） 1997 年に 3 号墳の一部と 4 号墳が発掘調査が実施された。その結果、4 号墳は直径 13m ほどの円墳で、無袖式の横穴式石室を有することが判明した。また、3 号墳については墳丘盛土と東西方向の石列が確認されている。4 号墳からは須恵器や鉄剣、耳環などが出土しており、飛鳥Ⅱ型式期に位置付けられる。また、4 号墳より出土した三足壺は全国的に出土例が少なく、渡来系集団との関りが指摘されており興味深い（松尾 1990）。

以上、既往の調査成果について触れた。集落と考えられる遺跡は弓削盆地と山国盆地、そして上桂川と弓削川の合流点で確認できる。古墳時代前期の集落としては上中遺跡、中期のものとしては東山遺跡、後期のものとしては上中太田遺跡・塔遺跡があるが、いずれも部分的な調査に過ぎず全体の様相は不明確である。古墳に関しても古墳時代前期末から中期にかけてのものが 2 基、後期のものが 4 基ほど調査されているに過ぎず、本地域全体の様相や時期的変遷などを考える上での課題は多い。また、古墳のとその造営母体となった集落についても検討材料が不足している。

3. 京北の地域区分およびグルーピング

前節では、京北地域での既往の発掘調査事例に触れた。しかし、いずれも部分的な調査にとどまっており、これのみで京北地域の古墳時代の様相を考えることは困難である。ここでは、分布状況から古墳のグルーピングを試みたい。

地域区分については、京北地域が上桂川および弓削川によって形成された「Y」形の狭小な平野部に遺跡の分布が集中することを踏まえ，大きく弓削地区（弓削盆地）・山国地区（山国盆地）・周山地区（弓削川と上桂川の合流点付近）、そしてその 3 地区から外れたものをその他地域として、4 つの地区に区分する。

周山地区 この地区は、弓削川と上桂川の合流点付近にあたる。大年古墳群（5）を除き、両河川に挟まれた丘陵部に古墳が分布する。この地区には 5 つの古墳・古墳群が確認できる。総数は 38 基ほどで、墳形別にみると方墳 5 基、円墳 33 基となる。この中で時期などが判明するのは古墳時代前期末～中期前葉に位置付けられる周山 1 号墳（1）のみで、ほかには折谷古墳群が横穴式石室を有する後期古墳と想定されている程度である。京北町域では、古墳時代前・中期に遡る古墳は現時点でこの周山 1 号墳と、山国地区の愛宕山古墳（12）しか確認されておらず、この両古墳は京北地域の首長墳と考えられている。これまで、愛宕山古墳が「周山盆地の全域を対象とする地域支配を確立した初代首長の墳墓」（京北町 1993）との評価がなされているが、時期的には周山 1 号墳がより古いと考えられ、この評価は周山 1 号墳にこそふさわしいと考えられる。周山地区は弓削川と上桂川の合流点に位置するが、弓削・山国地区と比して平野部が少なく、かつ古墳の分布数も少ない。この地域に現段階で最も時期が遡る周山 1 号墳が所在する点は、首長墓の性格を考えるうえでも興味深い。また、1 号墳の北西に所在する 4 号墳は 1 号墳と同じ程度の規模を有しており、その関係性が注目される[(3)]。なお、上桂川を挟んだ南側の丘陵には古墳時代中期の集落と考えられる東山遺跡が所在しており、将来的に周山 1 号墳とその造営母体という視点からも検討をする必要があろう。

山国地区 上桂川沿いの地域にあたる。塔遺跡が所在する付近は、南北に細長い山国盆地の中で平野部の幅が最も広がる場所にあたり、その周辺の丘陵部に多くの古墳が分布する。15 の古墳・古墳群があり、その総数は 103 基に上る。墳形でみると、円墳が 88 基、方墳が 11 基、墳形不明が 4 基となり、他地区に比して方墳が多い点は注目される。

この地区の古墳は、上桂川の左岸及び右岸で大別でき、さらに右岸域のものは上桂川からのびる谷単位など 6 つのグループに細分できる。まず一つ目は、現在の京北鳥居町中山田の谷付近に所在するのぼりお古墳（6）と鳥居古墳群・八幡神社古墳（7）からなる一群である。そして、二つ目に京北塔町の三明谷沿いに広がる三明院古墳（8）・塔村古墳群（9）・三宅谷古墳群（10）からなる一群。三つ目に三明谷の北東、京北森林公園付近の谷沿いに展開する院谷古墳群（11）・愛宕山古墳群（12）・比賀江古墳群（13）の一群。四つ目に、山国盆地の北側で、上桂川右岸沿いの丘陵部に所在する大野西古墳（14）・大野古墳群（15）・長池古墳群（16）からなる一群。上桂川左岸の丘陵部に展開する中江古墳群（18）・野上古墳（19）の一群。そして、山国盆地からはずれた上桂川と小塩川の合流点付近に所在する霊願寺古墳（17）と祖父江古墳群（20）からなる一群である。

山国盆地に所在する古墳のうち、時期が判明するのは 6 世紀末から 7 世紀初頭に位置付けられるのぼりお古墳と中期初頭に位置付けられる愛宕山古墳のみである。未調査ではあるが、大野古墳群や中江古墳群では方墳が確認されている。京北町域で確認されている古墳時代前・中期に遡る古墳はいずれも方墳であり、同じ墳形を有するこれらの古墳の時期や属性が注目される。また、『京北町遺跡地図』には中江古墳群に前方後円墳もしくは前方後方墳が存在する可能性を示す表現が確認でき、非常に興味深いものの現時点で確実なダブルマウンドの古墳は本地域では確認されていない。

山国地域では、集落としては塔遺跡が確認されている。この塔遺跡付近は山国盆地内で最も平野部の幅が広がる箇所であり、集落に最も適した場所と考えられる。この付近で将来的に古墳時代の遺構・遺物が確認される蓋然性は高い。

弓削地区　この地区は弓削川沿いの地域にあたる。現在の京北五本松町から京北北上中町にかけては、弓削川沿いに南北 4 ｋｍほど平野部が広がっており、それを取り囲む丘陵部に古墳が多く分布する。18 の古墳・古墳群があり、その総数は 87 基に上る。墳形でみると、円墳が 85 基、方墳が 1 基、前方後円墳の可能性があるものが 1 基となる。

この地区の古墳は弓削川の左岸及び右岸で大別でき、さらに谷等の単位で計 7 つのグループに細分できる。まず一つ目は、弓削川左岸の丘陵上に展開するしが田古墳群（21）・狭間谷古墳群（22）の一群である。二つ目は同じく弓削川左岸で、京北上弓削町付近を西流する小河川と弓削川の合流点付近に所在する筒江古墳群（23）・岩ケ鼻古墳群（24）からなる一群。三つ目は弓削川右岸で、京北五本松町付近から西にのびる谷沿いに所在する出口古墳群（25）の一群。四つ目は、弓削川右岸で矢谷付近に所在する塩田口古墳群（27）・塩田古墳群（28）・井崎古墳（29）・矢谷古墳群（30）・矢谷奥古墳群（31）の一群。五つ目は、鳥谷沿いに展開するふくがなる古墳群（32）・鳥谷古墳群（33）からなる一群。そして、六つ目は弓削盆地北部の久保谷付近に所在する上中古墳群（34）・八幡裏山古墳群（35）・宮の谷古墳群（37）からなる一群。そして最後は、弓削盆地北端の弓削川右岸に面する丘陵部に分布する・弾正古墳群（36）・筒江夏路古墳群（38）の一群である。

弓削地区の古墳で時期が判明するのは、鳥谷 4 号墳のみである。それ以外には、岩ヶ鼻・矢谷・矢谷奥古墳群が横穴式石室を有する後期古墳と想定されている。また、『京北町遺跡地図』によると岩ケ鼻 2 号墳が前方後円墳とされるが、地図には円墳の表現しか認められず、表には「直径　約 20m」と記されているのみである。したがって、現地時点において 2 号墳が前方後円墳か否かは不明と言わざるをえない。

なお、集落としては古墳時代前期の竪穴建物が確認されている上中遺跡、後期の竪穴建物が確認されている上中太田遺跡が存在する。

その他　前述の 3 つの地域より外れるものをまとめてその他とした。いずれも直接、弓削・山国盆地とは接しない箇所に分布し、その総数は 7 基である。ここでは、立地から 3 つのグループに分けておきたい。まず一つ目は、矢谷を抜けた先に所在する熊田川の北側に所在する熊田古墳（39）。二つ目は、鳥谷を西に抜けた先の田原川右岸に所在する田貫東古墳群（40）・白山古墳（41）・田貫古墳群（42）からなる一群。そして、周山地区から南西に 4 ｋｍほどの場所に所在する長野古墳群である。このうち白山古墳は直径 50 ｍほどの円墳とされているが、現地を確認すると墳丘下部では部分的に岩盤が露出している。岩盤の上の土で構成されている部分を本来の古墳の範囲ととらえた場合、直径 20m 前後の円墳と考えられる。この想定が正しければ、その他の地域には小型の円墳が少数分布する状況が認められるのみである。

以上、京北地域の古墳時代の遺跡について分布・立地からグルーピングを試みた。山国・弓削地区では各盆地内の最も平野部の幅が広がる場所、かつ弓削・上桂両河川の攻撃面を避けた微高地に集落が確認できる。また、その集落を中心とした周辺の丘陵部に古墳が多く分布している。これらの古墳は両河川からのびる谷等に沿って分布しており、それによっていくつかのグループに分けられる可能性が高い。それに対して、周山地区では弓削・山国地区と比して古墳の分布数が少なく、平野部の面積もかなり限られている。東山遺跡は弓削・山国地区の集落とは立地が異なり、上桂川の攻撃面に位置し、かつ丘陵上に立地する。古墳の分布状況や集落の様相を比較すると、周山地区はやや様相が異なる。これは、両河川が合流する周山地区の特性とも考えられ、現段階で時期が最も遡る首長墓の周山 1 号墳の存在と合わせて考える必要があろう。

本来的には、周辺の集落の様相や各古墳の諸要素を加味した上でグルーピングを行うべきだが、本地域では情報量が圧倒的に不足している。このような状況下では、まず試案としてグルーピングを示すことにも一定の意義があろう。

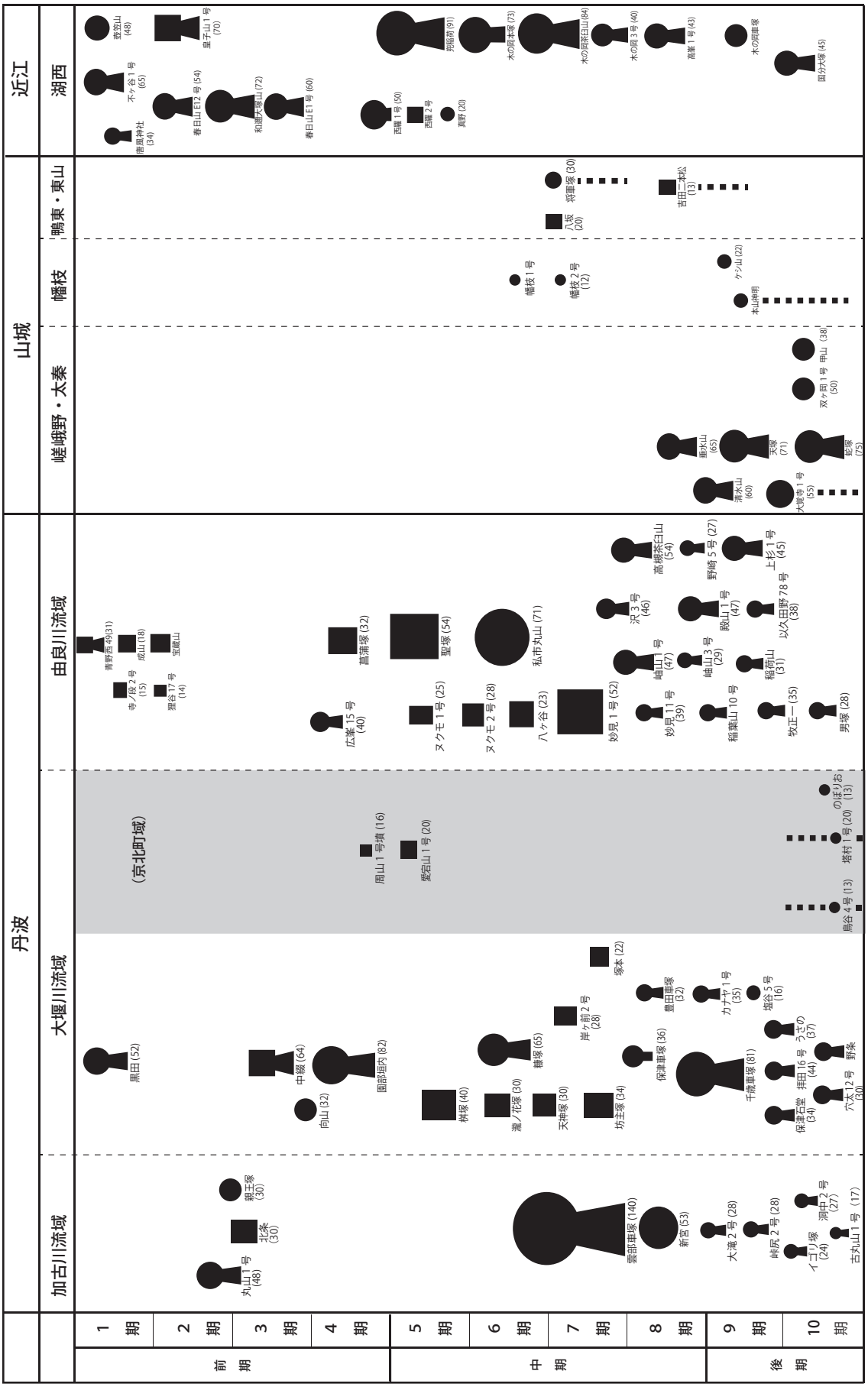

図31　京北地域及び周辺地域の主要古墳編年図

４．周辺地域の比較

以上、前節まで既往調査成果と古墳のグルーピング試案を示し、京北地域内の古墳について触れた。ここでは、最後に周辺の各地域と比較を簡単にではあるが行って結びとしたい。

京北町域は山に囲まれた地域であり、狭小な平野部しか有さない。しかしながら、多くの古墳が確認されている背景として、当該地が丹波・山城・近江・若狭を結ぶ交通の要衝であったことが考えられる。これまで、想定された各地域とのルートとしては、大堰川を下り八木町を経て丹波国庁の所在する亀岡市を通り嵯峨野に至るもの、上桂川を遡上し花脊を経て近江国に至るもの、周山から北上して陸路で若狭国に至るもの、右京区梅ケ畑から峠を経由し周山に至るものの４つのルートが想定されている[(4)]。これ以外にも、花脊から南下すれば鞍馬を経由して京都盆地の北西部に至る。ここでは、以上のルートを重要視し、丹波（加古川流域・大堰川流域・由良川流域）、山城（太秦・嵯峨野、幡枝、鴨東・東山）、近江（湖西部）と比較したい。図２は、それら各地域の主要古墳の編年表である。

まず、現段階における京北地域の古墳の特徴をまとめると①古墳の出現が遅れること②古墳時代前・中期に遡る古墳が少ないこと③首長墓として方墳が造営されていること、④現段階では前方後円墳や前方後方墳といったダブルマウントの古墳は認められないこと、⑤古墳時代後期に位置付けられる可能性の高い円墳が多量に存在すること、⑥確認されている後期古墳は６世紀末から７世紀代のものであることがあげられる。

まず、①についてである。古墳の出現が周辺域に比べて遅れる点については、由良川流域や山城各地域で認められる。由良川流域では古墳時代前期初頭に位置付けられる青野西遺跡 SX49 などが確認されている。しかし青野西遺跡 SX49 は墳形こそ前方後方墳であるが、その実態は前代の墓制の様相を強く引くものであり定型化した古墳としての要素が薄い。また、不整形な方墳である成山古墳や寺ノ段２号墳についても同様である。前方後円墳編年４期に出現する広峯 15 号墳は、景初四年銘盤竜鏡を出土した前方後円墳として著名だが、外表施設はなく主体部も木棺直葬であり、伝統的な墳墓群中に所在する。しかし、この段階で前方後円墳が認められる点は一つの画期と捉えられる。また、大堰川流域内（亀岡市域）では、前期後半に円墳である向山古墳が認められる程度である。

②については、山城で同様の傾向がある。古墳時代前期～中期に位置付けられる古墳としては、幡枝では幡枝１・２号墳、鴨東では八坂方墳や将軍塚古墳群が認められる程度で、嵯峨野・太秦では古墳時代後期初頭以前に遡る確実な古墳はこれまで知られていない。③については、由良川・大堰川流域や鴨東・東山地域で認められる。由良川・大堰川流域で、古墳時代中期を通して累代的に方墳が顕著に造営されているが、鴨東・東山地域では単発的に八坂方墳のみが認められる。また、山城の幡枝地域では時期不明ながら林古墳群や西山古墳群で長方形墳が認められており、これらも含まれる可能性があり注目される。

④については山城の幡枝と鴨東・東山地域が共通する。⑤については、いずれの地域も古墳時代後期の群集墳が認められる。しかし、古墳時代前・中期に顕著な古墳が認められないにも関わらず、多くの後期古墳が認められる地域としては、山城の幡枝や太秦・嵯峨野があげられる。なお、⑥については一般的に群集墳は古墳時代後期後半以降に顕著に認められること、京北地域の時期が判明している後期古墳がごく一部しかないことを踏まえるならば、現段階で⑥がこの地域の顕著な特徴といえるか否かについては断定できない。

以上、簡単にではあるが周辺地域との比較を行った。その結果、京北地域の古墳の動向は丹波内では大堰川・由良川流域、山城では太秦・嵯峨野、幡枝、鴨東・東山の各地域と類似した傾向を有することが分かった。特に、八坂方墳については古墳時代中期の方墳としては京都市内で特異な存在であったが、京北町から花脊・鞍馬を経由したルートを想定することによって、丹波地域との関りで評価できる可能性がある。

現段階では、資料的制約もありそれほど踏み入った考察を行うことはできなかったものの、古墳のグルーピングや周辺域での動向の比較検討により、多少なりとも京北地域の古墳時代の実像に迫れたならば幸いである。今後の京北町域の調査・研究に期待したい。

註

１）公表されている京都市遺跡地図台帳を参考に遺跡数を算出した。

２）報告書内では掘立柱建物３基と報告されている。ただし、掘立柱建物１は、建物跡として復元するには柱穴の位置・数の点から検討の余地があると考えられる。そこで、ここでは掘立柱建物１を柵列として認識している。

３）周山４号墳では、５世紀代のものと思われる須恵器が表面採取されている。

4）この点については、京都府教育委員会「４．周山瓦窯発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1979の中の歴史的環境で触れらている。

【参考文献】

宇野隆志 2014「Ｖ－３　将軍塚古墳群（平成 24 年度　No.93)」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成 25 年度
奥村清一郎 1988「大堰川水系における前・中期古墳の動向」『日野昭博士還暦記念論文集　歴史と傳承』
京都市文化市民局　2007『京都市遺跡地図台帳』第８版
2012『平安京以前－古墳が作られた時代ー』京都市文化財ブックス第 26 集
京都府教育委員会 1979「４．周山瓦窯発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
京都府埋蔵文化財研究会 2000『京都の首長墳』南山城ブロック
（財）京都府埋埋蔵文化財調査研究センター 1984「７.上中遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 10 冊』
1986「７.上中遺跡第３次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 20 冊』
1988「２.上中遺跡第５次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 27 冊』
1995「３.塔遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 64 冊』
1998「５.鳥谷古墳群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 82 冊』
2000「３.東山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 92 冊』
2001「２.東山遺跡第２次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報　第 99 冊』
京都府立丹後郷土資料館 1978『 両丹地方の方墳』常設展資料 4 京都府立丹後郷土資料館
京北町誌編さん委員会 1975『京北町誌』
京北町教育委員会　1983『愛宕山古墳発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第２集
1992『のぼりお古墳発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書 第３集
2001『周山古墳群　高梨経塚群　高梨子遺跡　発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書 第７集
近藤義郎編　1992『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社
平良泰久 1987「方墳二態」『京都府埋蔵文化財論集　第１集』
高橋克壽　2017「埴輪からみた丹波の方墳」『平成 28 年度　京都府域の文化資源に関する共同研究報告書（丹波編)』
辻川哲朗　2013「丹波・周山１号墳出土埴輪について」『同志社大学歴史資料館館報　第 16 号』
富山直人　2007「地域別概説　京都丹波の横穴式石室」『研究集会　近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
林博通　1998『古代近江の遺跡』サンライズ出版社
広瀬和雄　1992「第３章　前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社
細川修平　2011「三　丹波」『講座日本の考古学７　古墳時代　上』青木書店
2011「四　近江」『講座日本の考古学７　古墳時代　上』青木書店
松尾良晃　1990「岐阜県不破郡垂井町綾戸古墳出土特殊須恵器（三足壺）について」『大垣市文化財調査報告書』第 16 集
森浩一　1976「26-24　周山１号墳」『日本考古学協会年報 27』日本考古学協会
龍谷大学考古学実習室　2013『龍谷大学考古学実習』NO. 9
2014『龍谷大学考古学実習』NO.10

熊井亮介（京都市文化財保護課）